



ピアノリストからみた室内楽入門

第1回 アンサンブルにおける音量バランス①

深井尚子 ● ピアニスト
イラスト © 吉田しんこ

今月から、久しぶりにショパン誌で連載を開始することになりました。どうぞよろしくお願いいたします。今回の連載は、「ピアニストからみた室内楽」ということで、ピアノが入った、三重奏曲、四重奏曲、五重奏曲を取り上げ、アンサンブルの楽しみ方を提案していく予定です。

ピアノは、他の楽器とは異なり、メロディー、伴奏、和声まですべての音楽をたったひとりで奏でられるすばらしい楽器です。作曲家もバロックから現代に至るまでピアノのための独奏曲をたくさん残していますので、ピアニストは、誰かとアンサンブルをしなくても、ひとりで演奏ができてしまいます。しかし、ピアノ以外の楽器は、ほとんどピアノ伴奏を必要とします。そのため、伴奏者としてピアニストの出番はたくさんあるのですが、この連載では

「伴奏者」ではなく、室内楽というアンサンブルの中でのピアノについてお話していきます。

ソロでは味わえない喜び！

私は、現在、大学でピアノの専門実技のほか、室内楽の授業も担当しています。また、2年前に『メビウストリオ東京』を結成し、定期的

に室内楽の演奏会を行っており、その喜び、難しさを感じています。特に、学生の授業で客観的に室内楽を聴いていると、さまざまな問題点や注意する点が見えてきて、問題点をていねいに調整していくと、すばらしいアンサンブルができるようになることも体験しています。メビウストリオ東京はプロのアンサンブルですが、演奏会に向けて練習し、お互いの音を聴き、共通の解釈を見出

し、3人でひとつの音楽を奏でることがあります。これから1年間、ピアノを含んだ室内楽曲を具体的に紹介しながら、弦楽器、管楽器とのアンサンブルをピアニストの観点からお話していく予定です。

まず、室内楽で付き物のピアノの音量についてです。ピアノと弦楽

器の音量についてです。ピアノと弦楽



に「弱音ペダルを踏んでほしい」「ピアノの蓋を閉めてほしい」と言われた経験のあるピアニストは多いのではないかと思います。そんな時、あなたはどちらを踏みますか？ 素直に弱音（左）ペダルを踏んだり、ピアノの蓋を閉めたりしますか？ また、ピアノは楽器が大きいので、仕方ないと納得してしまいますか？ 答えは、

いづれも素直にしたがってはいけません。ピアノは、蓋を開けた時が最もピアノ本来の美しい響きを発揮することができま。また、左ペダルは、印象派などを演奏する場合音色を変えるために使用する機能であり、ppを出すための機能ではありません。ピアノ担当のあなたは、決して「音量」の問題を解決するために安易にそれらの機能を使つてはならないのです。その理由は、次号に詳しくお話します。



Naoko Fukai

ウィーン市立音楽院修了。ウィーン古典派をレパートリーの中心に演奏活動中。特にベートーヴェンを深く研究しており、学術論文多数。ベートーヴェンピアノ・ソナタのCD第1集、第2集は好評発売中。色とりどりの小品集ハイドン、ベートーヴェン（ヤマハミュージックメディア）の校訂解説の楽譜も好評。現在、北海道教育大学音楽コース准教授。